



# 京大広報

No. 563

2001. 12

## 目次

### 大学の動き

第3回運営諮問会議開催.....	1158
長尾総長の中華人民共和国、 アメリカ合衆国及び大韓民国訪問.....	1159
名誉教授称号授与式.....	1159
平成13年度日本語・日本文化 研修留学生の受入れ.....	1160
「第2回京都大学・東京フォーラム - 新時代の産学官連携の構築 -」の報告...1160	
キャリアサポートセンターを開設.....	1161
京都大学北海道講演会を開催.....	1161
平成14年度大学入学者選抜 大学入試センター試験の実施.....	1162
部局の動き	
文系総合研究棟披露式.....	1162
経済研究所寄附研究部門 創設記念式典・講演会・シンポジウム.....	1162
人間・環境学研究科創設10周年記念 シンポジウム・講演会・式典・祝賀会.....	1163
日誌.....	1164

### 栄誉

猪木正道名誉教授，益川敏英基礎物理学 研究所教授が文化功労者に選ばれる.....	1164
大嶽秀夫法学研究科教授が紫綬褒章を受章...1166	
医学教育等関係業務功労者の表彰.....	1166
保健コーナー	
風邪に関する新情報.....	1167
随想	
技術進歩と“ひと”の立場 名誉教授 西川禎一.....	1168

### 洛書

文理の溝.....	1169
-----------	------

### 資料

平成13年度京都大学市民講座講演要旨.....	1170
平成13年度教育改善推進費 (学長裁量経費)による研究課題.....	1173

### お知らせ

「白馬山の家」の冬季開設.....	1175
-------------------	------

### 話題

第1回京都大学宇宙太陽発電所 シンポジウムの開催.....	1176
編集後記.....	1176



第43回 11月祭



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 大学の動き

### 第3回運営諮問会議開催

第3回運営諮問会議が7月13日(金)に総長室において、井村裕夫委員長、荒巻禎一委員、稲盛和夫委員、大西正文委員、館 糾委員、中川久定委員、中坊公平委員、中村桂子委員、米沢富美子委員の出席のもと、開催された。

なお、運営諮問会議の目的及び委員の氏名については、『京大広報』No558(2001.6)もしくはホームページ(<http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/GAD/pid/simonkaigi.htm>)をご覧ください。

#### 主な意見

##### 現状と課題

##### 大学法人化

京都大学が法人化されると、経営的な観点が必要となる。その際、大学運営に必要な財源をどう確保するかという点も重要だが、その前提として京都大学の特色ある研究、魅力ある研究を外部にアピールしていくことも重要である。

大学法人化については、京都府でも問題意識をもっている。最近、府立大学について公認会計士による外部監査を行ったが、かなり厳しい指摘を受けた。大学に経営の専門家がいなかったことが大きな課題となっており、京都大学も同じ問題を抱えているのではない。

##### 教育研究に対する評価

学問分野には、研究業績の評価に基づき外部の競争的資金を導入しやすい分野とそうでない分野があり、後者に対する手当をどうするかが課題である。

大学の中核を成すのはやはり教育であるが、教育が競争原理に基づく評価になじむかどうかは問題がある。

理系には、客観的な評価基準として「ネイチャー」など権威ある雑誌への論文投稿・採択件数があるが、文系にはこれに類するものがない。例えば、日本における「西夏語の研究」は世界的な業績を挙げているのに、この分野の研究者がわずか3名しかいないため、予算配分につながるような評価のシステムがなく、不利な状況におかれている。文系の学問をいかに評価していくのかという観点から、現行の評価システムの見直しを行う必要がある。

「サイエンス」(アメリカ)、「ネイチャー」(イギリス)など外国雑誌の論文採択件数による業績評価を、日本の研究予算配分において重要視しすぎるのも問題である。我が国の学会における業績

評価をもっと重視するなど、評価方法の見直しも必要ではないか。

##### 東京連絡事務所

京都大学が、東京に連絡事務所を設置したのは、現在の日本の情勢を考えれば理解できる。ただ、京都大学が我が国を代表する存在であって欲しいと願う者にとっては、いっそのこと海外に設置したらという気持ちもある。京都が大学の街であって欲しいと考えており、京都の文化・伝統も重視して欲しい。

##### 教養教育

##### 人としての基礎の構築を

現在の法学教育は、総合的かつ広く高い視点を養わないままに実務に入ってしまった。ロースクール構想は、実務と教育の架け橋的なものと思うが、この新制度を活かすために大学における4年の教育がいかにあるべきかを良く考えていただきたい。教育は「草」でいえば「根」である。大学の4年間で「人」としての基礎的なところを構築していただきたい。

英語教育で言えば、その言語のルーツ・文化をはじめ、ヨーロッパ全体の文化が理解できるような形で教える必要がある。

##### 履修指導者の配置

大学において、何をいかに学ぶべきか、知らない学生が多くなっているため、個々の学生の状況に応じた適切なアドバイスを行う教員が必要であり、システムとして確立していただきたい。

##### 技術者養成の重視

日本の大学は研究重視であり、教育面、特に技術者養成という点が重視されていないが、米国のようにティーチングプロフェッサ - に対する評価がきちんと出来ていないことが背景にある。このためアジアの学生は、日本の大学ではなくオーストラリアなどの大学へ多く流れてしまっている。

京都大学は、学生の実験室一つをとっても設備

環境は貧弱である。設備環境の充実とともに、実験・実習教育の改善・充実に意を用いていただきたい。

#### 教養教育の改革に人と予算を

教養教育の問題は、今やアメリカでも大きな問題となっている。教養教育は、中学・高校教育を含めた日本の教育全体の問題であると思うが、大学に責任の一端はあり、大学としてなすべきことをきちんと果たしていただきたい。京都大学が全国の国立大学に先駆けて教養部を廃止したことが、日本の教養教育を崩壊させた一因であるともいわれており、建て直しは京都大学で是非行っていただきたい。京都大学の教養教育の一番の問題は、教養教育を担う責任体制が不明確であるということである。改革に向けて人と予算を注ぎ込ん

でいただき、全国の見本となるシステムを京都大学が示していただきたい。



## 長尾総長の中華人民共和国、アメリカ合衆国及び大韓民国訪問

長尾 真総長は、次のとおり中華人民共和国、アメリカ合衆国及び大韓民国を訪問した。

1. 10月3日から6日まで中華人民共和国を訪問した。この間、東アジア研究型大学協会(AEARU)第7回総会並びに香港科学技術大学創立10周年記念シンポジウムに出席し、同シンポジウムでは「Session Focused on East Asia」の議長を務めた。なお、本出張には塩田浩平総長補佐が同行した。

2. 10月10日から14日までアメリカ合衆国を訪問し、ハーバード大学のサマーズ大学長就任記念式典に出席した。

3. 10月17日から19日まで大韓民国を訪問し、ソウル市 JW マリオットホテルにて開催された“World Knowledge Forum2001”に出席した。

## 名誉教授称号授与式

10月23日(火)午前11時から、総長室において両副学長、荻野文丸工学研究科長及び山村則男生態学研究センター長出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行され、長尾 真総長から中西正己元教授(生態学研究センター)及び東 邦夫元教授(工学研究科)に称号が授与された。



新名誉教授を囲んで歓談する出席者

## 平成13年度日本語・日本文化研修留学生の受入れ

本学では毎年、「日本語・日本文化研修留学生制度」による留学生を受入れており、平成13年度は11カ国から20人を受入れることとなった。研修に先立ち、10月12日(金)京大会館において鈴木健二郎留学生センター長をはじめ関係教職員の出席のもと開講式が行われた。



なお、研修留学生の出身国の内訳は次のとおりである。〔( )内は人数〕

- 中華人民共和国(2)
- 大韓民国(7)
- ベトナム社会主義共和国(2)
- ブルガリア共和国(1)
- オランダ王国(1)
- ポーランド共和国(1)
- スウェーデン王国(1)
- 連合王国(1)
- ロシア連邦(2)
- アメリカ合衆国(1)
- ブラジル連邦共和国(1)

## 「第2回京都大学・東京フォーラム - 新時代の産学官連携の構築 - 」の報告

新たな世紀を迎え、京都大学の誇る先端的・独創的な研究活動を広く社会に発信し、先端技術分野における新産業創出等を促進するため、新時代の産学官連携の構築に向けての京都大学の積極的な取り組みや最新の研究活動等を紹介する第2回京都大学・東京フォーラムを開催した。

同フォーラムは、11月2日(金)日本科学未来館を会場に日本を代表する企業や関係省庁から参加を得て、長尾 真総長の「発展する京都大学」と題した

講演を皮切りに、土岐憲三総長補佐の「桂キャンパス - サイエンス・ヒル」、松重和美国国際融合創造センター長の「京都大学における産学官連携の新たな展開」の講演が続き、さらに「先端的・独創的な研究活動の紹介」として次の4分野から報告が行われた。

コーポレートガバナンスと日本経済

経済研究所教授 橘木 俊昭

産学連携による先端電子デバイス材料の開発

工学研究科教授 村上 正紀

医薬品開発基盤科学としての生体制御機構に関する研究

薬学研究科教授 川崎 敏祐

再生医学の研究と未来像

再生医科学研究所教授 笹井 芳樹

なお、当日、多くの在京企業のトップ及び経済団体の役員関係者や小野元之文部科学事務次官、及川耕造特許庁長官をはじめとする文部科学省、経済産業省や日本学術振興会など学術機関の関係者のほか、澤田敏男元総長や京都大学OB等、京都大学関係者を含む約300人の参加があった。



## キャリアサポートセンターを開設

本学学生部では、学生の就職活動を支援することを目的とした「キャリアサポートセンター」を11月6日(火)にオープンした。

ここでは、就職に関する情報を学生に対して提供する他、就職活動における、悩みや不安などについて、専門の職員を配置し相談に応ずるとともに、ガイダンスの企画や就職の手引きの作成なども行うこととしている。

施設概要は、以下のとおりである。

【1】 場 所 学生部庁舎の保健管理センター・留学生センター玄関を入り、正面左側

【2】 利用時間 月～金 午前9時～午後5時

【3】 施設内容

- ・情報検索用パソコン3台設置(インターネット接続)  
情報関連サイト集の閲覧、各企業ホームページの閲覧が可能
- ・求人情報個別ファイル  
求人票、募集要項、企業案内等のファイル

・就職関連図書

会社四季報、会社年鑑、教員採用試験参考書・資格試験参考書等

・雑誌

就職ジャーナル、受験ジャーナル、教員試験、リクルートブック、ディスコ就職応援マニュアル等

・面接ビデオ、企業セミナービデオ(貸出用)

・OBの職種別就職先一覧表及び就職活動記録

・その他 資料ハガキ等



## 京都大学北海道講演会を開催

京都大学地域講演会を、11月8日(木)北海道札幌市教育文化会館において開催した。

本講演会は、平成9年の創立百周年記念講演会を契機に本学の更なる情報発信を目的として、広く京都市以外の地域において実施している事業で、すでに名古屋、大阪、東京、愛媛、島根、静岡、上越、福岡の各地域で実施し、今回で9回目の講演会となる。

講演会には、京都大学卒業生をはじめ、札幌市近隣の高校生、社会人等予定人数をはるかに上回る約250人の参加があった。

最初に長尾 真総長より挨拶及び本学の現状についての説明があり、引き続いて、霊長類研究所松沢哲郎教授が「おかあさんになったアイ - チンパンジーの文化と教育 - 」というテーマで、チンパンジーが昨年4月に産んだアユムを育てる様子につい

てスライドを示しながら講演を行い、聴講者を沸かせた。講演後も松沢教授に多くの聴講者が詰めかけ質問を投げかけるなど、この講演に対する関心の高さがうかがわれた。



## 平成14年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成14年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成14年1月19日(土)及び20日(日)の両日に実施される。

このため、本学では1月18日(金)の授業を休止する。

試験の概要は、次のとおりである。

### 1. 期日及び試験教科

1月19日(土)

外国語, 地理歴史, 数学①, 数学②

1月20日(日)

国語, 理科①, 理科②, 公民

### 2. 試験場及び受験者数

農学部試験場(北部構内)

法学部・経済学部試験場(本部構内)

工学部試験場(本部構内)

総合人間学部試験場(総合人間学部構内)

医学部試験場(南部構内)

薬学部試験場(南部構内)

関西文理学院試験場

受験者数6,211人

## 部局の動き

### 文系総合研究棟披露式

経済学研究科・経済学部及び法学研究科が入居する文系総合研究棟が竣工し、10月9日(火)に表札の除幕式と披露レセプションが行われた。

文系総合研究棟には、経済学研究科の教官研究室、大学院生研究室、演習室、経済学部事務室、書庫等が配置され、今まで複数の建物に分散配置されていたものが1カ所に統合されたものである。また、文系総合研究棟の名称が示すとおり、法学研究科の教官研究室及び大学院生研究室も併せて配置されている。

当日は午後4時から、長尾 真総長をはじめ、両副学長、部局長出席のもと、表札の除幕式が行われ、その後、8階から地下2階まで順次、披露が行われた。

また午後5時から、2階の大会議室において、建物披露レセプションが開催され、本山美彦経済学

研究科長の挨拶、長尾総長の祝辞に引き続き、赤岡功副学長の乾杯の発声の後、懇談が行われ、盛会のうちに終了した。



右から長尾総長、本山経済学研究科長、木村法学研究科長、本間事務局長

(大学院経済学研究科)

### 経済研究所寄附研究部門創設記念式典・講演会・シンポジウム

経済研究所では、附属金融工学研究センターに「応用金融工学(野村証券グループ)寄附研究部門」を10月1日付けで開設した。これは先端的な金融工学を、低迷する日本経済の活力の再生と新しい産業の

新生に役立てることを目指したものである。今後3年を期間として金融工学を幅広く応用し、事業リスク管理による企業価値の向上、資産運用の高度化、金融部門の構造改革などの研究テーマに取り組む。

この研究部門の創設を記念して10月11日(木)に、式典と祝賀会が芝蘭会館にて行われた。当日は佐和隆光経済研究所長の式辞に始まり、赤岡 功副学長、野村證券株式会社取締役金融研究所長福原賢一氏の挨拶に続き、記念講演会が行われた。また祝賀会では本間政雄事務局長らによる祝辞が述べられた。

さらに11月15日(木)、東京都千代田区の東京国際フォーラムにおいて、創設記念シンポジウムが開催され、関係省庁及び経済界等から250人を超える参加者があった。

シンポジウムの冒頭、赤岡副学長及び野村證券株式会社代表取締役社長氏家純一氏より挨拶があり、引き続き、文部科学省大臣官房審議官(研究振興局担当)坂田東一氏から祝辞が述べられた。



#### 10月11日(記念講演会)

「金融工学のフロンティア」

経済研究所寄附研究部門客員教授

(イリノイ大学(シカゴ)教授)

Stanley R. Pliska

「応用金融工学(野村証券グループ)部門の研究テーマ」

経済研究所附属金融工学研究センター長

刈屋 武昭

#### 11月15日(記念シンポジウム)

基調講演(Ⅰ)「金融工学のフロンティア」

経済研究所寄附研究部門客員教授

(イリノイ大学(シカゴ)教授)

Stanley R. Pliska

基調講演(Ⅱ)「21世紀日本型資本主義は何処へ行く」

経済研究所長 佐和 隆光

パネルディスカッション

「企業価値創造と金融工学の役割」

パネリスト

経済研究所附属金融工学研究センター長

刈屋 武昭

経済研究所寄附研究部門客員助教授

(野村証券金融研究所投資技術研究部長)

加藤 康之

明海大学不動産学部教授 川口有一郎

中央大学理工学部教授 今野 浩

経済産業省経済産業政策局産業資金課長

坂東 一彦

東京電力株式会社企画部長 佐竹 誠

(経済研究所)

## 人間・環境学研究科創立10周年記念シンポジウム・講演会・式典・祝賀会

人間・環境学研究科は、平成3年に本学で最初の独立研究科として創設され、本年4月に創立10周年を迎えた。本研究科では、これを記念して、10月19日(金)に、学内外の関係者約150人の参加を得て、記念シンポジウムを開催し、翌20日(土)には、会場をホテルグランヴィア京都に移して、学内外の関係者約200人の参加を得て、記念講演会・式典・祝賀会を開催した。

記念シンポジウムでは、まず、堀田 満鹿児島大学名誉教授が「人と自然 - 南九州から南西諸島の現状 - 」、次いで、石川九楊京都精華大学教授(書家)

が「人間と環境 - 書という表現は環境問題である - 」と題する基調講演を行った後、討論を行った。

記念講演会では、中川久定国際高等研究所副所長・本学名誉教授が「大学問題雑考 - 「旧制度」下ヨーロッパの大学制度を手がかりに - 」、また、木下富雄甲子園大学長・本学名誉教授が「幻の大学? - 変わる大学 変わらぬ大学 - 」の演題で講演した。

記念式典では、江島義道人間・環境学研究科長が式辞の中で、10年にわたる研究科の発展の経緯を述べるとともに、発足が予定されている地球環境学大学院と協力しつつ、人間と環境の共生のために、研究と教育に邁進する覚悟であることを披瀝した。そ

の後、長尾 真総長、工藤智規文部科学省高等教育局長、竹中興慈東北大学大学院国際文化研究科長、竹市明弘本学名誉教授（初代研究科長）が来賓祝辞を述べた。次いで、学内各部局長からの祝電が披露され、続いて、山内 淳創立10周年記念事業実行委員長から記念事業の説明を行った。

式典終了後祝賀会が開催され、江島研究科長の挨拶、赤岡 功副学長、北川善太郎本学名誉教授（設置準備委員会委員長）の祝辞があり、藤澤令夫本学名誉教授の発声で乾杯した。参会者の和やかな歓談のなか、出席者のスピーチ等があり、豊島喜則本学名誉教授（前研究科長）の挨拶で祝賀会を締めくくった。



式辞を述べる江島研究科長  
（大学院人間・環境学研究科）

## 日誌

2001.10.1 ~ 10.31

- |        |   |     |   |
|--------|---|-----|---|
| 10月 2日 | ヒトゲノム・遺伝子解析研究管理委員会                              | 17日 | 国際交流委員会   |
| 3日     | 総長、中華人民共和国を訪問（6日まで）                             | "   | 総長、大韓民国を訪問（19日まで）                               |
| 9日     | 評議会   | "   | 京都大学春秋講義（秋季講座）水曜講義<br>（以後24日、31日、11月7日及び14日に開催） |
| 10日    | 総長、アメリカ合衆国を訪問（14日まで）                            | 20日 | 京都大学市民講座（引き続き27日に開催）                            |
| 15日    | 学生部委員会  | 23日 | 評議会   |
| "      | 京都大学春秋講義（秋季講座）月曜講義<br>（以後22日、29日、11月5日及び12日に開催） | 25日 | 核燃料物質管理委員会                                      |
| 16日    | 環境保全委員会   |     |   |

## 荣誉

### 猪木正道名誉教授，益川敏英基礎物理学研究所教授が文化功労者に選ばれる

猪木正道名誉教授，益川敏英基礎物理学研究所教授が平成13年度文化功労者に選ばれました。

以下に両氏の略歴，業績等を紹介します。

猪木正道名誉教授は，昭和12年東京帝国大学経済学部を卒業後，三菱経済研究所，成蹊大学教授を経て，昭和24年8月京都大学法学部助教授，同年10月教授に就任，政治史



講座，日本政治外交史講座を担当された。昭和45年京都大学を退官され，昭和53年まで防衛大学校長を，以後，平成2年まで青山学院大学教授を務められた。また昭和53年から平成8年までの間，平和・安全保障研究所理事長を歴任された。

猪木名誉教授は歴史的事象の背後に権力現象を見



据えつつ、ドイツを中心に広くヨーロッパ近現代史を研究され、数多くの後進を育てられた一方で、数々の画期的業績をあげられた。同名誉教授の著作は膨大な数にのぼるが、その中で『政治変動論』は、旧権力の崩壊と新権力の形成のプロセスを、権力核と民衆の心理分析に着目しつつ、該博な政治学的知識を駆使して解き明かしたものであり、以後の革命史研究に大きな影響を与えた。『共産主義の系譜』、『独裁の政治思想』、『独裁者』、『独裁の研究』（編著）は、全体主義権力という20世紀に特有の政治現象を、その思想、運動、組織に注目しつつ、斬新な理論的視座に基づいて分析したものであり、我が国における全体主義権力、さらに独裁に関する研究の礎を築いたものである。しかもここで提示された独裁概念は、途上国における独裁にも適用可能なものである。同名誉教授は京都大学時代に東南アジア研究センターの設立に尽力される一方、この分野でも若手研究者の育成に務められた。さらに同名誉教授は、日本の近現代史にも強い関心を抱き、豊かな比較史的知識に裏付けられて、『評伝吉田茂』、『軍国日本の興亡』等、多大の業績をあげられた。

同名誉教授の学問的業績を振り返るとき、それはまさしく戦争と革命に明け暮れた20世紀という時代に真正面から取り組まれたとの感をうける。とくに左右のイデオロギー対立に引き裂かれた戦後の我が国の学界、論壇にあって、同名誉教授は一貫してリベラルな姿勢を貫き、学問研究に打ち込むかたわらで、すぐれた時代感覚に依拠しつつ、時々の時事的問題に対しても健筆をふるわれ、時代の動向に大きな影響を与えられた。なかでも日本の安全保障に関する論説は、バランス感覚に富むもので、今日なお日本の外交政策の指針となっている。また同名誉教授の活躍は海外にも及び、ミュンヘン大学、スタンフォード大学、コロンビア大学等で長期在外研究に携わるかたわらで、数々の国際会議に招請され、講演、研究報告を行われた。

これらの業績に対し、同名誉教授は、昭和56年に紫綬褒章、同61年11月に勲一等瑞宝章を授与されている。このたび長年にわたって我が国の政治学をリードしてきた輝かしい功績が評価され、文化功労者として顕彰されたことは、誠に喜ばしいことである。  
(大学院法学研究科)

益川敏英教授は、昭和37年名古屋大学理学部を卒業、昭和42年同大学院理学研究科博士課程を修了後、名古屋大学理学部教務職員、同助手、京都大学理学部助手、東京大学原子核研究所助教授、ついで京都大学基礎物理学研究所教授、京都大学理学部教授を経て、平成9年より京都大学基礎物理学研究所教授に就任され、現在に至っている。この間平成7年から1年間学生部長、留学生センター長、体育指導センター長、平成9年から現在に至るまで、基礎物理学研究所長を務められている。また平成13年からは、内閣府総合科学技術会議専門委員を兼務されている。



益川教授は、多年にわたり、素粒子理論の研究・教育に努め、昭和48年に小林 誠高エネルギー加速器研究機構教授（当時京都大学理学部助手）と共に、

物質を構成する基本粒子のクォークが少なくとも6種類あるとする予言を理論的に提唱し、宇宙組成の謎を解明する「CP対称性の破れ」の現象を説明する「小林・益川理論」を発表された。最近実験によって6種類のクォークが確認され、さらに今年、この現象を裏付ける実験結果が高エネルギー加速器研究機構とスタンフォード線形加速器センターから報告された。これらの成果は素粒子物理学、宇宙物理学の多くの研究分野の発展に極めて大きな影響を与えるものである。

この業績に対し、昭和54年仁科記念賞、同60年米国物理学会よりJ. J. Sakurai賞、同年日本学士院賞、平成7年朝日賞、中日文化賞を授与された。

先駆的な研究業績と学術発展への指導的活動ならびに人材の育成に大きく寄与した貢献と実績が評価され、このたび文化功労者として顕彰されたことは、誠に喜ばしいことである。

(基礎物理学研究所)

## 大嶽秀夫法学研究科教授が紫綬褒章を受章

我が国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、大嶽秀夫法学研究科教授が、平成13年11月3日に紫綬褒章を受章されました。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

大嶽秀夫教授は、昭和41年京都大学法学部を卒業後、東京大学大学院、シカゴ大学を経て、同49年専修大学法学部専任講師、同51年助教授、同53年東北大学法学部助教授、同60年教授に昇任された。その後、平成4年政治過程論講座担当として京都大学法学研究科教授に配置換となり、現在に至っている。この間、シカゴ・ロヨラ大学客員助教授、シンガポール・南洋大学客員教授、バングラデシュ・ダッカ大学客員教授を歴任され、また昭和58年から同60年までハンプルク大学において、平成11年から同12年までパリ政治学研究所において長期在外研究に従事された。

大嶽教授は、永年にわたって政治学とくに日本政治、比較政治、政治理論の分野において画期的な論稿を数多く発表され、日本の政治学を主導されてきた。

日本政治研究では、『現代日本の政治権力経済権力』において、アメリカ政治学の中で最も洗練された理論枠組であった多元主義モデルを導入し、特定争点における政策決定過程の分析をされた。注目すべきは、特定争点の研究を通じて体制分析を行うために、影響力の恒常性に着目する制度エリート論を用いて多元主義モデルを補強された点である。このような周到な概念装置を構築することによって、現代日本政治の研究水準を飛躍的に高められた。

比較政治研究では、『アデナウアーと吉田茂』に



において西ドイツと日本の戦後保守体制の原点を形成した政治リーダーに着目し、両国の政治経済上の共通点と相違点を分析された。比較研究は特定地域の専門家によってなされるのがほとんどであり、同教授のように日本政治を専門としながら、外国についても広い知識と深い洞察を示した比較研究はそれまで皆無であった。本書はわが国比較政治研究に新たな一步を記されるものであった。

政治理論研究では、『政策過程』において議会研究、官僚政治研究、エリート・サーベイ・リサーチなど様々な政策研究の最高水準の実証研究を素材にして、各々の手法の持つ長所と限界を検討し、政策研究を志すものに貴重な一里塚を与えられた。

また、同教授は、昭和62年に政治学研究誌『レヴァイアサン』の発刊に加われ、若手研究者に多大な知的刺激を与え、日本政治の実証研究の質量両面での飛躍に貢献された。

同教授は、日本政治学会において、理事、企画委員長、国際交流委員長として、学会活動に多大な貢献をなされるとともに、日米、日韓、日欧政治学会間の学术交流の事業全般においても中心的な役割を果たされた。

以上のように、同教授は、教育者ならびに研究者として、政治学研究の水準を高め、多くの優秀な人材を育て、さらには学術文化行政にも尽力されてきたことが評価され、本年度の紫綬褒章を受章されたことは、誠に喜ばしいことである。

(大学院法学研究科)

## 医学教育等関係業務功労者の表彰

佐野貞子技官（医学部附属病院病理細菌技術員）、及び高坂唯子技官（同病理細菌技術員）は、医学に関する教育研究に係る補助的業務に関し、また、中尾静枝技官（同准看護婦）は、医学に関する患者診療等に係る補助的業務に関して顕著な功労があったことにより、11月21日文科科学大臣より平成13年度医学教育等関係業務功労者の表彰を受けられた。



佐野貞子氏



高坂唯子氏



中尾静枝氏

## 保健コーナー

## 風邪に関する新情報

今年も風邪の季節となりました。今回は、(1)インフルエンザに特效薬ができたこと、(2)普通の風邪を早く治す薬はないこと -- を中心にいくつかのメッセージをお伝えします。

ふだん風邪と言っている病気には、「普通感冒」と「インフルエンザ」、そして「扁桃炎」や「急性気管支炎」などがあります。

この中のインフルエンザは、ウィルスによって引き起こされ、高熱や全身の関節痛、だるさを来すもので、抵抗力の弱い人では肺炎を併発するなどして命取りになりかねません。子供では脳症を起こして死に至ることもあります。時々大流行し、最近では1998年から99年にかけて猛威を振るいました。今年は大きな流行にはならない見通しですが、それでも全国で数百万人がかかると考えられます。

最近このインフルエンザ・ウィルス(A型およびB型)の増殖を抑える2種類の薬が日本でも承認され、そのうちの一つを保健診療所に常備しました。インフルエンザの症状が出た翌日までにこの薬を服用すると、インフルエンザを早く終わらせることが期待できます。ただし必ず効くとは限らず、胃腸障害などの副作用が出ることもあります。また標準処方である5日分の薬代だけで5,000円(診察料や処方料は別)と費用がかかります。(それ以外の検査や投薬をしなかった場合の負担額は、共済本人で1,470円、学生では学生保険で還付を受けたとして2,230円です。)この薬は、家族がインフルエンザにかかった場合などの予防にも効果があることが証明されていますが、保険は利きません。

予防にはインフルエンザ・ワクチンの効果が認められています(ただし、はしかや風疹の予防接種のような確実性はありません)。高齢者や免疫を抑える薬を使っている人、あるいは医療従事者などが対象になり、高齢者では公費の補助が受けられます。まれに副作用があります。

次は扁桃炎です。口の奥の左右に扁桃があります。大部分の成人では小さくなって目立たないのですが、一部に大きいままの人がいます。ここにある種の細菌がつくと激しい喉の痛みと高熱が出、まれにはリウマチ熱を経て心臓弁膜症を来したり、糸球体腎炎を引き起こしたりすることがあります。そのため喉の所見を見て扁桃の炎症が確認できれば抗生物質や抗菌薬を使います。抗生物質は薬疹や全身性

の虚脱など比較的副作用が多く、また抗菌薬には併用されがちな解熱・消炎剤との相互作用があるので、慎重に使う必要があります。

急性気管支炎は風邪に続いて起こることが多いのですが、単独で生じる場合もあります。多くはウィルス性で、咳と痰が主症状です。熱が出ず、痰があまり出ないか、出ても透明の場合は、症状が1か月ほど続くことがありますが、あまり心配はいりません。咳がひどければ咳止めを使います。黄色くドロツとした痰が頻回に出る場合は炎症が明らかですから、入念に診察して検査や治療を決めます。熱が高い場合、寝汗を伴う場合は肺炎や結核のこともありますから、聴診した上でX線検査をします。なお、緑色の痰の大部分は鼻水が喉に落ちたもの(後鼻漏)です。

そして普通の風邪です。喉の痛み、鼻水や鼻づまりがあり、熱もしばしば出ます。ほとんどがウィルス性ですので抗生物質は効かず、特效薬はありません。炎症を抑える薬を飲んでも早く治るわけではなく、むしろ長引く可能性も指摘されています。しかし風邪の症状はつらいので、保健診療所では症状に合わせて各種の薬をお出ししています。対症療法とはいえ、ごくまれに副作用もあります。市販の薬はいくつかの成分を混ぜたもので、それぞれの効果はさほど強くありません。

以上でおわかりのように、風邪をひいたと思ったら、「高熱が出て全身が痛む」「飲み込めないほど喉が痛い」「汚い痰が出る」「寝汗が出る」という場合に医師を受診します。また、「ときどき扁桃をほらすことがある」「心臓や腎臓の病気がある」「副腎皮質ホルモンなど免疫力を抑える薬を使っている」場合も早めに医師を受診します。それほどではなくても、不安がある場合は気軽に受診してください。そして、仕事や勉強は早めに切り上げ、夜はゆっくり休み、アルコールやタバコは控え、人にうつさないようマスクをし、うがいと手洗いをこまめに行い、果物を多めにとります。

風邪をひかないコツはあるのでしょうか。十分証明されたものではありませんが、規則正しい生活や日頃の軽い運動(免疫力の向上)、人混みに出ないことやうがい・手洗い(病原体を遮断)、あたりでしょうか。Gesundheit!(お大事に)

(保健管理センター所長 川村 孝)

## 随想

## 技術進歩と“ひと”の立場

名誉教授 西川 禎一

私学の学長という立場にあると、残念ながら自らの研究は思うに任せないが、若い世代の研究者たちが顧問というような肩書を付けて幾つかの研究会に誘ってくれるので、精々顔を出すことにしている。



その一つに「創発システム・シンポジウム」というのがあり、先日夏休みの間に3日間にわたって富山県の山中に出かけた。

「創発」というのは未だあまり耳慣れない言葉だが、われわれシステム屋仲間が集まって、ちょうど90年代の初めから「自律分散システム」、引き続いて「創発的機能形成のシステム理論」という二つの重点領域研究を実施したのが、上記シンポジウム発足のきっかけである。要するに、それぞれに単純な機能を持った部品（個体）の集合が、何らかの自律的相互作用によって高度な機能を発現するシステムを形成する、そのような過程を人為的に応用しようというもくろみである。ますます複雑化する人工システムを計画・設計・製作したり運用・制御したりするのに、“ひと”が子細に介入して行うのは実際上不可能であるから、システム自体に一定の自律作用を埋め込む、そういう狙いが込められている訳である。

自律あるいは創発システムの研究と関連して、高度な知能と運動機能をそなえた自律ロボットを創り出し、彼らにサッカーをやらせるロボカップという国際的イベントがあり、上記のシンポでも熱い論題の一つとなった。ロボカップでは、21世紀半ば頃までにロボット・チームの代表がFIFAのワールドカップに出場し、ひとのチームと対等以上に戦う、という目標が掲げられている。この目標の可否は別にして、介護や災害救助に役立つロボットを開発しようというのが裏の（本当の）狙いである。

ご記憶の方もあろうが、ディープ・ブルーと名づけられたスーパー・コンピュータがひとのチェス名人と対戦して、数年前に勝利を収めた（2勝1敗2分け）。それならばと、知能だけでなく運動機能もひとと並み以上のヒューマノイドを創り出す。これは工

学屋にとって極めて挑戦的でありかつ魅力的な仕事である。目標の達成可能性については仲間内でもさまざまな見方があるが、現在までの趨勢から見れば、私自身は技術的には十分に可能である（ゲームルールの如何によるが）と思っており、その意味では楽観派である。知能の基本を情報処理とみなせば、部分的にはひとよりも格段に優れた性能を発揮する技術は既に現出しているし、運動機能については古くからさまざまな道具・機械装置が広く使われ、近年になってそれらの操作・制御の技術も飛躍的に向上した。つまり、部分を見れば人工物の性能はひとのそれを遥かに凌駕し、ひとができない仕事を楽々とこなす域に達している。だからこそ介護や救難・救助ロボットの意義があり、必要とされるのである。

しかし問題は、そのような技術がさらに発展し（上に言う部分が拡大し）、自律性においても相当なレベルに達したとき、われわれひと自身の立場や価値をどのように理解し評価するのか。ひとの複製（クローニング）にも匹敵する、あるいは自然の存在としてのひとと人工物としての自律知能ヒューマノイドの対比という構図において、それ以上に極めて大きな課題が提示されることになる。身近なところで想定しても、例えば介護ロボットによって家族の絆に変化が現れる、あるいは救助ロボットによってひとどうしの助け合いやボランティア活動の様相が変わってしまう。その結果、ひと自身のしっかりした自覚がなければ、ひとどうしの疎外が増幅されるような効果も現出し兼ねない。換言すれば、人工物がひとの支援をするという域を抜け出して、ひとに取って代わる存在にまでなる可能性がある。

このような事情は、別段ロボットやライフサイエンスに限ったことではないであろう。21世紀の科学技術の研究開発に当たって、われわれは改めてひと、自然、学問、技術等の全体像を自覚的に見直す必要があると思われる。殊に、宗教的基盤の極めて脆弱なわが国においてその必要度は高いのではなからうか。

（にしかわ よしかず 大阪工業大学長

元工学部教授、専門は複雑システム工学）

## 洛書

## 文理の溝

内井 惣七



文系，理系の学問や知識，  
人文学と科学との溝が言われ  
始めてすでに長い時間がたつ。

チャールズ・スノーの『二  
つの文化』，初版は1959年だ  
から，これから数えてもす  
でに40年を越す。いまさらな  
ぜこんな古い話を持ち出すの  
かと不審に思う読者もおられ  
よう。しかし，わたし自身は  
この「溝」の両側，ないしは  
そこにかかる不安定で細い橋  
の上を行き来してきたので，  
このテーマは切実な問題だと  
感じ続けている。

わたしは工学部の専門課程  
に進む頃から哲学への転身を  
考え始めた。別に哲学の「京  
都学派」にあこがれたからで  
はない。当時，新しい哲学と  
いわれていた「論理的経験論」  
，あるいは「科学哲学」のい  
くつかの著作に感銘を受けた  
からである。この流れ，ある  
いはその近辺にいた，カルナ  
ップ，ライヘンバツハ，ヘン  
ペル，ポパーなどは，いずれ  
も，何らかの形で「文理の溝」  
を渡って新しい哲学を築こう  
とした人たちであるが，ここ  
では，そんな高尚な話ではなく  
，下世話な例で「文理の溝」  
を例証しよう。

わたしが四回生の時，卒業研  
究で配属された研究室の教授  
にわたしの転身のもくろみが  
伝わってしまい，「きみ，文  
学部へ何しに行くんや，小説  
家にもなるつもりか？」と一  
喝された。腹の中では「××  
か」とうそぶいたが，「だか  
らといって，実験の手は絶対  
に抜きません！」としおらしく  
答えて切り抜けた。もちろん  
，学友諸君にも「変人」と見  
なされる。親も例外ではなく  
，「なに，哲学？ 役立たずな  
るのか！」。はたまた，学士  
入学の手続きに訪れた文学部  
の窓口で，親切な事務員の方  
が，「あなた，せっかく工学  
部出たのだから，文学部みた  
いところに来るのはやめなさい  
」と忠告してくれるありさま  
。ご忠告はありがたいが，こ  
ちらはアメリカ留学を考えて  
いたし，工学部のペースで2  
年間やってきた身にとっては  
，(1965年当時の)文学部  
は何と鷹揚でゆっくりとした  
ペースのところか，と半ばあ  
きれたことも事実。停年がそ  
ろそろ見えてきたい

までも，わたしは文学部の中  
では名うての「イラチ」で通  
っている。つまり，「溝」は  
学問だけでなく，それをやる  
者のライフスタイルにもかな  
り反映されているふしがある。

この手の話は，修行時代  
だけではない。「科学哲学者」  
に対する最大の侮辱は，「科  
学を知らない」と「哲学を  
知らない」という文句である  
。つまり，「溝」を埋めよう  
と奇妙な努力をしているに  
もかわらず，「溝」の両側  
から攻撃を受ける。文学部  
に「科学哲学科学史」の講座  
が新設されたのは1993年  
のことだが，わたしは倫理  
学講座からこちらに移った。  
欧米では，まずこんな事は  
考えられない。例えば，19  
世紀ウィーンのマツハやボ  
ルツマンが「倫理学」を教  
えるところを想像するのは  
むずかしい。哲学でも「専  
門化」がはるかに進んでい  
るのである。もちろん，科  
学での専門化の流れが，こ  
ちらにも波及しているので  
あろう。そこで「科学を不  
知」というけなし言葉にも  
注意が必要となってくる。例  
えば，物理学者は進化生物  
学に通じているのか？ 分子  
生物学の人は一般相対論の  
基本概念を知っているのか  
？ タテ割りの溝を何らかの  
形でカバーできる学問や人  
材が必要なはずである。

実は，わたしの文学部での  
講義に際しての，大きな悩  
みのタネの一つも，似たよう  
なところにある。科学哲学  
の入門講義でまず絶対に取り  
上げなければならないのは  
，近代科学の模範だったニ  
ュートン力学である。ところ  
が，最近の学生の大半は物  
理学を知らない。「運動の  
三法則」といっても知らない  
のだから，その前から説か  
なければならない。これは  
，文学部だけの事情だと誤  
解しないでいただきたい。  
理学部で，生物系で院に進  
学しようかという学生でも  
，高校，大学と物理学をと  
っていないという学生が珍  
しくないのだから恐れ入る。  
「物理学は，われわれの文  
化の重要な一部ではないのか  
？」と思うとき，わたしは  
「物理系人間」にされるの  
だろう。ともあれ，細い橋  
の上で警笛を鳴らし続ける  
しか道はない。

(うちい そうしち 大学院文学研究科教授)

## 資料

## 平成13年度京都大学市民講座講演要旨

本年度の京都大学市民講座は、「ミュージアム」を共通テーマとして、10月20日及び27日の土曜日の午後、2回にわたり新法経第一教室において開講した。

講義科目と講師は次のとおりであった。

チンパンジーとヒトの間

霊長類研究所教授 小嶋 祥三

古地図とミュージアム

文学研究科教授 金田 章裕

京大総合博物館はどんな博物館か

総合博物館長（理学研究科教授） 瀬戸口烈司

情報メディア技術とミュージアム - 実世界と仮想世界 -

総合情報メディアセンター教授 美濃 導彦

なお、講演要旨を以下に掲載する。

## チンパンジーとヒトの間

霊長類研究所教授 小嶋 祥三

京都大学の総合博物館には、霊長類研究所のチンパンジー「アイ」がおこなったのと同じ課題を解くコーナーがある。チンパンジーがこれまで考えられていたよりもはるかにヒトに近い存在であることは、遺伝子のレベルから実験室での「言語」行動、野外での道具使用、群れでの「政治的」行動まで、いろいろなレベルで明らかにされてきた。総合博物館の展示はそれを実感するよい機会になるだろう。一部のチンパンジーの研究者はこの点を強調する目的で、チンパンジーを「ちんぱんじん」と呼んだり、「ヒト」と呼んだりする。これはヒトとチンパンジーを含むヒト以外の霊長類を明確に分けてきた従来の考えに対する批判、修正と考えられる。

それに対して、このような両種間の近さを認めた上で、違いに着目する研究もある。これは従来の考えを修正する面はあるが、従来の考えに沿った研究とも考えられる。今回はこのようなヒトとチンパンジーに明確な差異を認める視点から話をすすめてみる。ヒトとチンパンジーで違いが大きい行動はなんだろうか。直立二足歩行、ことば、道具、模倣、利き手などがそれにあたる。これらの行動の萌芽的なものがチンパンジーなど大型類人猿にもみられる。しかし現生のヒトとチンパンジーを比較した場合、これらの点に関して、両種間の差は非常に大きいのも事実である。

ことばに関してヒトは音声言語、話しことばを発

達させた。チンパンジーに話しことばを教えるプロジェクトは散々な結果となった。6年ほど訓練しても僅か数語しか「話せ」なかったのである。チンパンジーの聴覚、音声系はヒトのそれと異なる。一方、視覚は両種で大きな差がない。その結果、研究は、上肢と手指、図形語や手話など視覚を利用する方向に向かった。それらの研究はある程度の成果を収めた。しかし、記号を獲得したが、文法までも獲得しえたかについては意見が分かれる。

道具の製作や使用もヒトとチンパンジーでは大きな差がある。ヒトに石を投げたり、巢に枝を突っ込んで、アリを釣ったり、石で木の実を割ったりする程度である。そしてそれが群れ全体に必ずしも広がらないことは模倣の問題に関係するだろう。サル真似といってもチンパンジーを含むヒト以外のサルはいわれるほど真似が得意でない。

これらの行動と脳の関係について考えてみる。ヒトの脳左半球の損傷で失語症が生じることはよく知られている。道具や、模倣の障害も左半球の損傷で起こり、失行症といわれる。こうしてみると、ヒトで顕著に発達した行動は脳の左半球で営まれている。このような身体の構造や機能に左右非対称性があることをラテラリティという。ヒトで顕著なラテラリティは利き手である。ヒトは右利きであり、それは脳から見ると左半球優位である。チンパンジーにはヒトのような一方に偏った利き手はない。大型類人猿との共通祖先から分かれたヒトが発達させたのは、大脳半球間の構造・機能差だっただろう。そこにチンパンジーとヒトの間の溝があるようだ。

## 古地図とミュージアム

文学研究科教授 金田 章裕

古地図というのは、近代測量や近代地図の図法が確立する前に作成された地図全般を意味する。絵図ないし古絵図という言葉がこの意味で使用する人もあるが、例えば古代には、行政上の正式の図ではない地図を絵図と称していた例があり、適当な使い方ではない。

古地図には、手書きのものと同様に、印刷・出版されたものがあるので、書籍の場合と同様に、博物館のみならず、図書館においても収蔵されている。ヨーロッパや北アメリカ・オーストラリアなどの国立・州立図書館や大学図書館などでは、ほとんどの場合、地図室・地図コレクション・地図図書館・地図部門などと名称は多様であるが、地図類を収蔵し、利用に供する独立した部門があり、専門の担当者が配置されている。日本の国公立・大学図書館などと大きな違いがある点である。

地図は、文章で表現し難い空間情報や空間認識を表現する手段として独自に発達したものであり、文章のみの書籍とは異なった内容を有している。また、多くは一枚ものとして作成されてきたが、中には地図帳(Atlas)として書籍の形となったものもあり、この点では書籍との違いは少ない。多くの場合版型が大きい。これらの点が古地図収蔵のための独自の部門と専門の担当が必要とされる理由である。

古地図が表現している空間情報や空間認識は、図

法が確立しておらず、また一般に凡例も示されていないので、その読解には一定の知識が必要とされることが多い。一見して不正確に思われるような表現にしても、作成時の空間認識や空間情報のありようを反映していることが多く、かえって当時の実状を知る大きな手がかりとなる場合がある。例えば、中世・近世の日本で作成された世界図には、強く仏教的な世界観を反映しているものが多く、当時の人々が世界をどう考えていたか、という世界認識を知る上で得難い資料となる。身近な町や村の古地図においても、作成者・利用者や利用方法などにより、土地の把握の状況を如実に知ることができる。

京都大学にもこのような古地図が多数収蔵されている。特に附属図書館と総合博物館に多い。附属図書館には本来刊行物としての古地図が多かったが、最近大塚京都図コレクションや宮崎市定氏旧蔵地図などの寄贈を受け、一層充実してきた。総合博物館のものは、本来その前身の文学部博物館において、地理学・日本史学などの教室が収蔵してきたものである。

理想的に言えば、これらの古地図類は、むしろ古地図博物館ないし地図博物館として、独自に、また総合的に収蔵・整理し、研究・展示などの利用に供するのが望ましい。すでにそのような意向を示している機関もあるが、まだ実現はしていない。人間社会の過去における空間情報や空間認識を探る上でも、一層の体系的な収蔵と研究が望まれる。

## 京大総合博物館とはどんな博物館か

総合博物館長 瀬戸口 烈司

博物館というのは、標本類の収蔵、研究、展示の三本の柱がからみあってはじめて機能する。京都大学にはもともと、文学部附属の陳列館があったが、自然史系の博物館はなかったのである。博物館はなくとも、研究はどんどん進み、京大全体では、いつのまにか250万点にのぼる標本類が蓄積されていた。それらを収蔵して保管し、標本の価値を生かす博物館の設立は京都大学の教官の悲願となっていた。それが、1997年4月にやっと当時の文部省に認められ

た。

研究のための博物館がほしいというのが大学人の願いだったが、博物館ができると展示という新たな課題が生まれる。しかし、どのような展示をするかについて具体的に考えていた人は、ほとんどいない。展示という業務は、大学人の弱点のひとつなのである。京大には250万点もの標本類が蓄積されている。そのなかから選んで展示すればよい。標本に不自由はしないが、どのような標本を展示するのかについてしっかりとした理念が必要である。

京大は探検大学かといわれるほど、野外活動がさかんな大学である。京大総合博物館の展示のメイン・

テーマには、京大のフィールド・サイエンス、つまり野外研究をえらんだ。地質学や動植物の生態学、栽培植物の起源を探る研究などは、野外で、自然現象を観察してはじめて研究データが得られる。日本だけでなく、外国に出かけて行って、研究を展開する。アフリカのチンパンジー研究、西南アジアのコムギの起源の研究、東南アジアの熱帯多雨林の一斉開花の研究などは、京大でユニークに発達してきた野外研究である。研究室で思索したり実験するだけでなく、野外に出かけて行って研究データを取り、自然現象を観察して考察するという、野外研究のもしろさを展示するのである。

## 情報メディア技術とミュージアム - 実世界と仮想世界 -

総合情報メディアセンター教授 美濃 導彦

コンピュータと情報通信の技術が融合した情報メディア技術（IT: Information Technology）は、人間同士のコミュニケーションの方法を大きく変える可能性がある。情報メディア技術により、人間同士がいつでもどこにいてもコミュニケーションがとれるようになりつつある。人間社会は人間同士のコミュニケーションを基盤として成り立っているのだから、これは社会全体を大きく変える可能性を秘めており、IT革命といわれている。現在は、その経済性ばかりが強調されているが、社会は確実に情報化社会へと変わっていくだろう。

物とそれを記述する情報は、本来は切っても切れないものである。ところが、情報が一人歩きするようになると、実体を伴わない情報や事実と異なる情報も、他の情報と混ざって情報の世界を作り出してしまふ。このようにして、我々が普段生活している実世界だけでなく、情報技術の作り出す無数の仮想世界が出現する。好むと好まざるとにかかわらず、我々は実世界と仮想世界の双方と関係を持って生活していかなければならなくなる。仮想世界の行為は実世界に反映され、実世界の情報は仮想世界に入っ

1970年代に国立民族学博物館（民博）が開館してから、全国で博物館ブームが巻き起こった。地方公共団体の博物館が次々に計画され、それらの建設を担当した会社には、展示に関する膨大な技術が蓄積されていった。京大総合博物館では、展示の基本設計の立案にあたっては展示の専門業者に協力を依頼した。

京都大学の研究の実力と、日本の展示業界のレベルの高さが相まって、京大総合博物館の展示が完成した。総合博物館が、社会に開かれた京都大学の窓口となることを心から願っている。

ていく。

ミュージアムは、実物を集めるのがその役割の一つである。その実物を多くの人々に見てもらい、感動してもらう必要がある。この感動はミュージアムを訪れた人にしか得られないものである。こう考えると、情報化社会でもミュージアムは変わらないのだろうか？

京都大学にミュージアムが出来たということ、そしてそこにどのようなものが展示されているかということを一一般の人にはどのようにして知るのだろうか？新聞記事やテレビニュース、立て看板などからだろう。情報化社会では多くの人々は仮想世界から情報を得る。ということは、ミュージアムも仮想世界で頑張らないと実世界で人が来てくれなくなる可能性が高いのである。所蔵している物の中で重要なものを仮想世界にどんどん提供する必要があり、これがさらに進めば「バーチャルミュージアム」へとつながっていく。

このようにして、バーチャルミュージアムが出来てくると、今度は、実際にミュージアムへきた人がバーチャルミュージアムをどう活用できるかが課題になる。実世界を重視しながら仮想世界とスパイラルを描き発展していくであろう情報化社会のミュージアムについて考えてみたい。



## 平成13年度 教育改善推進費（学長裁量経費）による研究課題

本年度の教育改善推進費（学長裁量経費）については、下記の32件が採択されました。  
採択された研究課題及び代表者等は、次のとおりです。

プロジェクト課題	代表者所属・職名・氏名	プロジェクト関連部局
全学共通科目外国語等履修予備登録システムの構築	総合人間学部 教授 林 哲介	総人・メディア
全学共用教育施設における情報利用環境の整備にむけて - 総合人間学部図書館のDVD等のマルチメディア機器とその周辺の整備	総合人間学部 学部長 宮本盛太郎	総人・人環・図
学術的国際コミュニケーション能力育成のためのカリキュラム開発	教育学研究科 教授 子安 増生	教
化学体験学習プログラム	理学研究科 教授 大須賀篤弘	理
粒子線科学の連携研究教育体制の構築についての調査研究	理学研究科 教授 今井 憲一	理・医・工・放 生研・原子炉
卒後臨床研修必修化に伴う指針及びカリキュラムの作成	医学部附属病院 病院長 田中 紘一	病院
桂キャンパスで始まる京都大学工学研究科の21世紀の挑戦	工学研究科 研究科長 荻野 文丸	工
エネルギー科学研究科の将来構想に関する調査研究	エネルギー科学研究科 教授 笠原三紀夫	総人・エネ科・ 人環・エネ研・ 原子炉
生物系実習の統合整備とフィールドステーション化構想	農学研究科 教授 田中 克	理・農
公開実験授業の実施及び成果の公開	高等教育教授システム開発センター 教授 田中 每実	高等教育
大学授業の参加観察によるFDの組織化	高等教育教授システム開発センター 教授 藤岡 完治	総人・経・薬・ 工・農・高等教 育
大学評価に関する研究集会の実施	高等教育教授システム開発センター 教授 田中 每実	高等教育
企画展示『今西錦司の世界』 - 京大のバイオニア・ワーク -	総合博物館 館長 瀬戸口烈司	総人・教・理・ 農・アア・博・ 東南・人文・霊長
留学生の日本語自習CALL環境の構築に関する研究	総合情報メディアセンター 教授 壇辻 正剛	総人・メディア・ 留学セ
日本における東洋学の将来像	人文科学研究所 所長 桑山 正進	総人・人文
「自然と人間」の教育の体系化：今西錦司生誕百年記念事業	霊長類研究所 教授 松沢 哲郎	総人・文・教・ 理・アア・博・ 東南・人文・霊長
全学共通科目の学習に必要なとする学生用図書及び大学院生の研究を支援する専門参考図書の充実整備	附属図書館 館長 佐々木丞平	全学部
留学生の科目履修のための情報資料提供	附属図書館 館長 佐々木丞平	全学部
広報活動の充実に向けた学外広報誌創刊号の発行について	広報委員会 副委員長 森本 滋	総務部・広報委員会
京都大学の諸情報のWeb化に関する検討と実現	広報委員会 副委員長 森本 滋	総務部・広報委員会
新入生向け小人数教育（小人数セミナー）の受講登録システムの改善	カリキュラム専門委員会 委員長 田中 克	総人・学生部・ カリキュラム専 門委員会
教育改善に関するミニシンポジウムの連続的実施と報告書の刊行	企画・調整専門委員会調整（評価）委員会 委員長 八木紀一郎	経・高等教育・ 学生部・企画調 整専門委員会
短期留学国際教育プログラムの充実	留学生センター センター長 鈴木健二郎	留学セ
法科大学院の設置準備	法学研究科 教授 中森 喜彦	法
ビジネス・スクール設置に関する調査	経済学研究科 教授 吉田 和男	経・情報学・国 際融合
アフリカ地域研究と国際協力 - 成果の公表と社会への還元 -	アジア・アフリカ地域研究研究科 教授 掛谷 誠	アア

プロジェクト課題	代表者所属・職名・氏名	プロジェクト関連部局
複雑系科学に関する研究教育拠点としての情報発信	情報学研究科 教授 船越 満明	情報学
大学への環境管理システム導入の検討	環境保全センター センター長 橋本 伊織	理・薬・工・農・ 環境セ・施設部
国際融合創造センターの将来のシナリオ ～調査研究とIICフェア～	国際融合創造センター センター長 松重 和美	国際融合
地球環境学大学院における分散的教育研究環境の整備	地球環境大学院設置準備委員会 委員長 尾池 和夫	経・工・農・人・ 環・人文
KUINSⅢを利用した、生物・医学分野における学内共同研究データの共有と共同利用機器解析データの配信システムの構築	遺伝子実験施設 施設長 清水 章	理・医・生命・ ウイルス
大学キャンパス施設データベースシステムのネットワーク運用と対象の拡張	施設部 技術顧問 宗本 順三	工・施設部

## 平成13年度学術研究奨励金による研究課題

本年度の学術研究奨励金については、下記の20件(人文・社会系3件,理学・工学系7件,生物医学系10件)が採択されました。採択された研究課題及び研究者は、次のとおりです。

### 【人文・社会】系

研究課題	所属・職名・氏名
夏目漱石「夢十夜」における日本・中国・西欧文化の摂取の様相に関する文献学的研究	総合人間学部 助教授 須田 千里
初期近代英国における民衆演劇と出版の関係に関する研究	文学研究科 助教授 廣田 篤彦
契約の第三者効に関する比較法的考察	法学研究科 教授 高田 美夏

### 【理学・工学】系

研究課題	所属・職名・氏名
分子固体薄膜への電荷注入による超伝導体開発	理学研究科 助手 大塚 晃弘
ナノギャップFETおよびSPMを用いた $\pi\sigma$ 共役系分子膜の電子物性評価	工学研究科 助手 石田 謙司
微粒子プラズマにおける微粒子ポテンシャルの発光分光法を用いた解析	工学研究科 助手 高橋 和生
分子流効果を利用した新しい真空ポンプの開発	工学研究科 講師 杉元 宏
フェノールフタレイン骨格を有する機能性ホスト分子の創製：情報の可視化	化学研究所 助手 椿 一典
地殻変動域における地下構造変動検出の為に溶存化学種長期モニタリング手法の開発	化学研究所 助手 岡村 慶
植物ホルモンによる植物生長・分化の制御機構の解明	化学研究所 助手 水谷 正治

### 【生物・医学】系

研究課題	所属・職名・氏名
脊椎骨進化の分子進化学的背景に関する研究	理学研究科 助手 和田 洋
視床原基増殖期を司る分子メカニズム	医学研究科 講師 石橋 誠
細胞間接着構造が形成する上皮・血管のバリアの研究	医学研究科 助教授 古瀬 幹夫
新規細胞内小器官“centriolar satellites”の構造・機能の解析	医学研究科 助手 久保 亮治
脳基底核における興奮性および抑制性ネットワークの系統的解析	医学研究科 助手 藤山 文乃

研 究 課 題	所 属 ・ 職 名 ・ 氏 名
側底膜型ペプチドトランスポータの発現クローニングと薬物動態制御因子としての役割解明	医学部附属病院 助 手 寺田 智祐
経頭蓋的大脳磁気刺激法を用いた言語機能の解明およびコミュニケーション障害治療法開発に関する研究	医学部附属病院 助 手 美馬 達哉
薬物による脳機能の可塑的变化のメカニズム	薬 学 研 究 科 助 手 中川 貴之
X線結晶構造解析によるトランスフェリンの共同性アニオン結合サイトの研究	農 学 研 究 科 助 手 水谷 公彦
ヒストンのメチル化による遺伝子発現制御機構	ウイルス研究所 助 手 立花 誠

## 平成13年度学術出版助成金による研究課題

本年度の学術出版助成金については、下記の1件が採択されました。

採択された研究課題及び研究者は、次のとおりです。

### 【人文・社会】系

研 究 課 題	所 属 ・ 職 名 ・ 氏 名
指示体系と人称体系の歴史的研究	人間・環境学研究科 助 手 李 長波

## お知らせ

### 「白馬山の家」の冬季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、「白馬山の家」を、今冬については下記のとおり開設されます。

この「山の家」は、雄大な北アルプスの峰々に囲まれた、中部山岳国立公園白馬山麓の梅池高原にあり、降雪量も多く、雪質の良さとともにスキーには絶好の条件を備えており、初心者向きから上級者向きまで各種のゲレンデがあります。

建物は山小屋風の木造2階建てで、間取りは1階が食堂兼談話室、2階が寝室、地階が浴室、乾燥室からなっています。

#### 記

- 名 称 京都大学<sup>はくば</sup>白馬山の家
- 所 在 地 長野県北安曇郡<sup>あずみ おたり</sup>小谷村大字千国字柳久保乙869の2  
(交通機関)  
JR 大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親<sup>おや</sup>の原<sup>はら</sup>」下車、徒歩約20分
- 開設期間 12月10日(月)～1月10日(木)並びに2月20日(水)～4月10日(水)
- 収容人員 26人
- 宿泊費 1泊2食付き 体育会会員2,000円 / 非会員・教職員2,600円  
プラス暖房費300円
- 申込み及び問い合わせ先  
体育会事務室(西部構内総合体育館内、内線2574)

## 話題

### 第1回京都大学宇宙太陽発電所シンポジウムの開催

10月25日(木) 宙空電波科学研究センターと経済研究所が世話役となって、第1回京都大学宇宙太陽発電所(英語名 Solar Power Station: SPS)シンポジウムを開催した。冒頭、土岐憲三総長補佐の挨拶があり、引き続き、本学でSPSの研究に関わる研究者が順次その成果を発表し、活発な意見交換が行われた。当日は、学内から51人、学外から30人、計81人の参加があり、SPSに対する関心の深さが伺えた。

本学はこれまでSPSの研究、特にマイクロ波送受電やSPSの経済解析、大型レクテナサイトの研究などにおいて国内外において先導的役割を果たしてきた。とりわけ、このSPSはマイクロ波送受電技術、太陽光発電技術、宇宙技術等、非常に多くの技術の複合体であり、社会学、経済学、医学、農学等の知識が必須のシステムである。幸い、本学は総合大学であり、社会学、経済学、医学、農学等幅広い分野の研究者の協力を得やすい状況にある。また、従来の「専門型」の研究から「複合型」の研究に向かっている科学技術の現状は、世界的な潮流であり、次世代エネルギーとして期待されているSPSの実現に向け、その成果を期待したい。

なお、当日のプログラム等は次のとおりであった。

- ・はじめに 土岐憲三総長補佐
- ・SPS研究の現状  
松本 紘(宙空電波科学研究センター)
- ・RASCにおけるSPS研究  
篠原真毅, 松本 紘, 橋本弘藏  
(宙空電波科学研究センター)
- ・クライストロン開発の現状  
大出力化と高効率化  
増田 開, 山本 靖, 吉川 潔  
(エネルギー理工学研究所)
- ・マイクロ波送電技術を利用した農業機械の電動化  
笈田 昭, 中嶋 洋, 宮坂寿郎,  
久保田智也, 大西晋嗣(農学研究科)  
松本 紘, 篠原真毅  
(宙空電波科学研究センター)
- ・SPSと通信技術  
橋本弘藏, 松本 紘, 篠原真毅  
(宙空電波科学研究センター)
- ・SPS受電関連施設の南方海洋立地の意義と技術的可能性  
渡邊英一, 宇都宮智昭(工学研究科)
- ・京都議定書のゆくえとSPSの未来  
佐和隆光(経済研究所)
- ・ディスカッション



(宙空電波科学研究センター・経済研究所)

### 編集後記

大学の広報誌の役割には、“知の交流”の場を提供する事があげられます。近年、大学に“競争原理”を導入すべきであるとの声が大きくなってきています。しかしながら、過度の競争は学問の発展をいびつにしてしまう恐れがあります。競争があり、そして「勝」「負」が明確であるということは、評価のものさし(枠組)が決まってしまう場合に限られます。文・理を問わず歴史に残るような画期的な研究は、必然的にそれまでの学問の枠組みを打ち破るようなものであります。競争よりも、もっと大切なもの、すなわち異分野間の“知の交流”とそれに基づく新しい学問の発展があってこそ、大学は大学らしさを保つことができます。

京大広報を通して、学内での新しい“知の息吹”を皆さんに伝えることができればと思っています。  
(吉川記)